

(第1回 午前)

2018(平成30)年度入学試験問題

# 国 語

(試験時間：50分)

《注 意》

- (1) 問題は  ～  まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に書いてください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに書いてください。
- (4) 解答用紙のみ回収します。
- (5) 解答に際して、句読点、符号などが含まれる場合には一字分として数えます。

城西大学附属  
城西中学校



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

オーロラは北極や南極に近い緯度の高い地方でしか見られないかと思っている人もいるかもしれませんが、日本の北海道でもまれに見られることがあります。そのオーロラは赤く、まるで

X かのようXに、夜の地平線を赤くそめあげます。

日本でもっとも古い歴史書である『日本書紀』には、西暦六二〇年に、「天に赤気あり、長さ一丈あまり、その形は雉の尾に似たり」と、現在の奈良県でオーロラがあらわれたという記録が残っています。

(A) 藤原定家の『明月記』(一二〇四年)は古代の天体観測書として有名ですが、そこにも「北の空から赤気が迫ってきた。その中に、白い箇所が五カ所ほどあり、筋も見られる。恐ろしい光景なり」という記録があります。これは京都にあらわれたオーロラのことです。

これらの日本で見られたオーロラは「Y」と表現されているように、赤一色の炎のような光が空をおおったのです。

どうしてこのようなことがおこるのか、人類は昔から想像をめぐらせてきました。

中世ヨーロッパの人々は、天空に神様や天使がいると信じ、光のカーテンのむこうがわで戦争がおきていると想像しました。(B) オーロラの出現を、人間の世界に不吉なことが起きる前ぶれとうけとり、おそれていました。またグリーンランドやアラスカ、北欧など、北極圏の近くに住む人々は、オーロラはわたしたちの住む世界と死者の国をつなぐ窓だと信じました。

(C)、現代ならこういえるでしょう。「光のカーテンのむこうには宇宙がある」と。

①そこには神様の世界も不吉の前兆ありません。しかし、それよりはるか広大で、②はるかにはげしい世界が広がっています。

今から光のカーテンを少しだけ開けて、そのむこうがわにある宇宙のようすをのぞいてみましょう。

オーロラは、「風」ととても深い関係にあります。

オーロラは、風の力で「光っている」のです。しかし、それは地球の風ではありません。③「太

「陽風」という、太陽からふいて、宇宙をわたってくる風が、オーロラを光らせているのです。そよ風やつむじ風など風にはいろいろありますが、光を生む風なんてきいたことがありませんよね。いったい、宇宙からふいてくる太陽風とは、どんな風なのでしょう。

太陽風は、その名のとおり、太陽そのものから発生します。

太陽は地球よりはるかに巨大で、燃えさかる「星」です。とてつもないエネルギーで、熱と光を宇宙の暗闇にはなっています。質量は地球の約三十三万倍もあり、その表面の温度は約六千度。鉄でさえもあつというまに蒸発してしまうほどです。太陽のまわりの「コロナ」という部分は、太陽の表面よりさらに温度が高く、なんと百万度以上もあります。太陽風はこのコロナから発生します。

たき火のそばにいくと、炎がだす熱と光のほかに、あたためられた空気がけむりや灰をまいてあげながら、空の遠くまでのぼっていくようすを見ることが出来ます。<sup>④</sup>それと同じように、太陽の表面に爆発がおきると高温のガスが発生し、太陽からふきだして宇宙に広がっていきま

す。  
(中略)

では、<sup>⑤</sup>なぜ日本から見えるオーロラは赤い色をしているのでしょうか。映像や写真などでよく見るオーロラの色は、だいたい緑色ですよね。

じつはオーロラの色は、地球に入ってきた太陽風が、酸素やちっ素など、大気中のどの成分とぶつかるかによって異なります。

オーロラのいちばん高いところは赤い色をしています。これは酸素が出している光です。日本から見える赤いオーロラは、この部分です。地球は丸いので、遠い北極あたりの上空のオーロラのすそのほうは、地平線のむこうにかくれてしまいます。それで、上のほうの赤い光だけが日本に届くのです。

オーロラの赤色より低いところでは、酸素がだす光は緑色に変わります。有名な緑色のオーロラは、この部分が見えているものです。

緑より低い、カーテンのすそのあたりでは、ちっ素が青やピンクの色をだしています。

こうして高さによって色がわかれているのは、大気の高いところでは、酸素やちっ素が<sup>⑥</sup>そ

れぞれの重さごとに層をつくっているからです。

ではオーロラは地上からどれくらいの高さにあるのでしょうか？

オーロラは太陽風がつくりだしているものなので、地球の天気とは関係なく、じつは毎日のように発生しているのですが、雲のある日は地上からは見えません。それは、オーロラが雲よりも高い、空のかなたで光っているからです。

距離でいうと、地上百キロメートルから五百キロメートルの間です。宇宙ステーションが地上四百キロメートルのあたりを飛んでいますから、オーロラがあらわれるのは宇宙と地球のさかいめといってもいいでしょう。地球でいちばん高い山のエベレストが八千八百四十八メートルなのでオーロラのカーテンのすその部分でも、エベレストよりはるかに高いところにあるのがわかるでしょう。

つまり、空のとても高いところで、地球に入ってきた太陽風を大気がくいとめているのだともいえます。

オーロラは、太陽と地球がせめぎあう、戦いの炎といえるかもしれません。

(真右衛門『オーロラの正体』)

※赤気……太陽の発する暗赤色の光のこと。

問一 空らん X に<sup>あ</sup>当てはまる比喩表現を十字以内で自由に考えて答えなさい。

問二 ( ) A～Cに当てはまる言葉としてふさわしいものを、それぞれ次のア～オの中から選び記号で答えなさい。

ア そして    イ しかし    ウ たとえば    エ なぜなら    オ また

問三 空らん Y に当てはまる言葉を、本文中から二字で抜き出して答えなさい。

問四 ——部①「そこ」の指し示す内容を、本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問五 —— 部②「はるかにはげしい世界が広がっています」とありますが、これはどういうことですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問六 —— 部③「『太陽風』とありますが、これはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その性質によってオーロラを発生させることのできる風とできない風がある。

イ 太陽のまわりにある、太陽の表面の温度の二百倍近い温度のところから発生する。

ウ 太陽のまわりにある、「コロナ」という質量が地球の百万倍以上の部分でふいている。

エ 宇宙をわたってくる光を生む風であり、日本国内でも昔からよく観測されている。

問七 —— 部④「それと同じように」とありますが、太陽風の発生のしかたは「たき火」の場合とどのような点で共通しているのですか。解答らんにあうように本文中から、四十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 —— 部⑤「なぜ日本から見えるオーロラは赤い色をしているのでしょうか」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本でも緑色のオーロラも発生しているが緯度の関係上かくれてしまうから。

イ コロナから発生する熱はとても高温なためその色は赤い色をしているから。

ウ 地球は球体なので日本からはオーロラの低い部分はかくれて見えないから。

エ 日本のまわりでは太陽風は酸素やちっ素などとよくぶつかっているから。

問九 —— 部⑥「それぞれの重さごとに層をつくっている」について次の問いに答えなさい。

(1) この「層」の中で一番重いものとして紹介されている大気中の成分を答えなさい。

(2) (1)で答えた成分によって見えるオーロラの色はすぐ上の層の色を答えなさい。

問十 本文の内容に当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太陽は質量が大きく表面温度もとても高いため、宇宙に存在するあらゆるものが一瞬で蒸発してしまう。

イ 藤原定家が書いた『明月記』には、オーロラはまるで雉の尾のような形をしていておそろしかったと記されている。

ウ エベレストをちょうど十倍の高さにすると、寒い日に発生するオーロラの下側の層の高さにとどく。

エ オーロラは宇宙をわたってくる風によってできるため、地球上の天候に関わりなく発生する。

## 二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「僕（瀬尾）」は上京して東京の大学に入り、卒業後は仕事を転々としながら現在は工事会社の雑用係として働いている。十数年ぶりに偶然ふるさとの小学校の工事に関わることになり、デパート『ちどりや』の娘で「僕」が当時好きだった「鳥谷さん」の消息が気にかかる。本文は、当時「僕」と同じようにふるさとの街に暮らしていた同級生の「川島さん」と久しぶりに連絡を取った後に続く文章である。

白鷺公園には、灯籠流しをするひとたちがたくさん訪れていた。すでに川面は灯籠の灯で埋まって、こいオレンジ色に染まっている。

① 約束の時間ちょうどに河川敷に降りた僕を、川島さんはすぐに見つけてくれた。会うのは中学の卒業式以来だったが、「全然変わってないね、若いよ、瀬尾くん」と川島さんはうらやましそうに言う。その川島さんは、予想以上に A 太っていた。でも、「おばさんでしょ？ほんと、おばさんになっちゃったでしょ？」と本人が言うほどではない。ダンナさんと幼稚園に通う子ども二人は、川島さんの実家でいま花火をしているのだという。シアワセ太りというのは、こういうのを言うのかもしれない。

灯籠舟は『満月堂』の紙バッグに入っていた。岸辺に設けられた流し場は満員だったので、どちらからともなく、もうちよつとあとにしようか、と流し場から少し離れた石段に腰かけた。誰の灯籠を流すのかは、川島さんは言わなかったし、僕も訊かなかった。代わりに、お互いの近況を話した。

川島さんのダンナさんは公務員で、『満月堂』はいずれ弟が継ぐのだという。去年までは本店に加えて『シンフォニー』と『ガーデン』の両方にテナントで入っていたが、売り上げの落ち込みがつづく『シンフォニー』のほうは撤退した。

「まあ、しかたないよね、<sup>②</sup> そういうのも時代の流れだし、こっちも商売だから……」  
最初はさばさばとした口調でも、途中から声は寂しそうに沈み、最後はしょんぼりと黙り込む。



僕の近況も、最初はなるべく明るく伝えるつもりだったが、無理だった。でも、嘘はつかなかった。見栄も張らなかった。大学を卒業してからの十年間をこんなにくわしく話したのは、考えてみれば初めてのことだった。

「なんかさ、俺、なにを間違えちゃったんだろうかな、って思っ……」

「間違えてないよ」

「そうかな。じゃあ、やっぱり不況とか時代が悪いつてことなのかな」

同級生でもうまくやってる奴はいるんだけどさ、と寂しいオチをつけようとしたら、川島さんは「間違えてるひとなんて、誰もいないと思うよ」と言った。「でも、間違えなくても、うまくいかないこととか、どうにもならないことって、あるよ」

灯籠舟の流れる川面を見つめる彼女の横顔は、<sup>③</sup>僕ではない誰かに語りかけているようだった。

そして僕は、その誰かの顔を——クラスの女王陛下だった頃の面影で、思い浮かべることができる。

川島さんは紙バッグから灯籠舟を取り出して、膝に載せた。

「瀬尾くんに会えるって思わなかったでしょ、美智子ちゃん」

僕がニヤンコを撫でたときのように、灯籠の和紙をそつと撫でながら言う。<sup>④</sup>「よかったね」と笑う。

「……いつだったの?」

覚悟はしていたはずなのに、<sup>⑤</sup>声がかすれ、震えてしまった。

「五年前。交通事故だった。新聞にちっちゃく出てたの。同じ名前で、歳も同じで……嘘みたいんだけど、住んでる街も同じで、隣同士の区だったの」

もしかしたら、どこかですれ違っていたかもしれない。どちらかが「あれ?」と気づいていれば、声をかけて、また昔のように友だちになっていたかもしれない。

「本人だっというのを確かめたのか?」

「市内の斎場に片っ端から電話かけて、お葬式に行ってみたら、美智子ちゃんの写真が飾ってあった」

享年<sup>きやうねん</sup>二十八。独身だった。勤務先の小さな会社から車で帰宅する途中、カーブを曲がりそこねてしまった。お葬式は斎場の中でも小さめのホールで営まれていた。花環<sup>はなわ</sup>は、鳥谷さんの勤め先から来ていただけだった。両親もいた。二人とも『ちどりや』があつた頃とは別人のように老け込んで、泣きじゃくる母親も、うつろな目の父親も、焼香する川島さんを見ても思ひださなかつたという。

「悲惨<sup>ひさん</sup>でしょ。⑥こんなに悲しい人生<sup>にんじやう</sup>ってないと思わない？」

僕は黙つてうなずいた。悲しいというより、やりきれない。

「とことん運が悪いよね」

「だよな……」

川島さんは膝の灯籠を上から覗<sup>のぞ</sup>き込むような格好で「ねーっ、美智子ちゃん、瀬尾くんなんて全然<sup>ぜんぜん</sup>まじだよねーっ」と冗談めかして言ったが、僕が黙つたまましていると「ごめん、嘘……」とつぶやいて、「でもね」とつぶけた。

「全然<sup>ぜんぜん</sup>うまくいかない人生でも、価値がないとか、意味がないとか、生きててもしょうがなかつたとか、そんなことないと思う。だってさ、美智子ちゃんのお葬式の写真、おとなになつてからのだつただけよ、笑つてたんだよ。すごい楽しそうに笑つてる写真だつただよ。いいことあつただよ、絶対。うまくいなくても、いいこと、あつた……」

ハナをすすり、「わたしは、そう信じてるから」と涙声<sup>なみこゑ</sup>で言った。

鳥谷さんの笑顔が浮かぶ。子どもの頃の、幼い笑顔だ。おとなになつてからの鳥谷さんの顔は想像できない。でも、それでいいのかもしれない。答えがわからないから、僕たちは信じてることができる。鳥谷さんはおとなになつてからも、笑うとあの頃の面影どおりだつただよ、僕も信じる。

(重松清「ロング・ロング・アゴー」新潮文庫)

※灯籠舟：「僕」や「川島さん」が住んでいた地方では、お盆の最後にロウソクを立てた小

さな舟を川に流す風習がある。

※ニャンコ……ふるさとの小学校にすみついている学校公認の野良猫。

※『満月堂』…ふるさとの街で有名な和菓子屋。『ちどりや』に入っていたこともあった。  
※『シンフォニー』『ガーデン』…ふるさとの街にあるデパート『ちどりや』に対抗するために作られた大型商業施設。

問一 文中の波線部(あ・い)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 部①「約束の時間」とありますが、二人は何をする約束をしていたのですか。文中から四字で抜き出して答えなさい。

問三 文中の空らん A に入る言葉として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぶくぶくと      イ さばさばと      ウ がつがつと      エ だらだらと

問四 —— 部②「そういうの」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 営業がうまくいっていた店が、うまくいかなくなってしまったこと。  
イ 『満月堂』を継ぐのが川島さんの弟になること。  
ウ 白鷺公園で行われるイベントが少しずつ変わっていくこと。  
エ 二人の仕事がそれぞれ変わり続けていること。

問五 —— 部③「僕ではない誰か」とありますが、誰のことですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問六 —— 部④「『よかったね』と笑う」とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美智子ちゃんが瀬尾くんを好きだったことが素直にうれしかったから。  
イ 美智子ちゃんと昔にしていた約束を思い出したから。  
ウ 瀬尾くんに自分の思いを伝える決心ができたから。  
エ 美智子ちゃんを送ってくれる友だちが増えてたのしかったから。

問七 —— 部⑤「声がかすれ、震えてしまった」とあるが、なぜそのようになったのですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が隠し続けていたと思っていた嘘が、実はみんなに知られていたことが分かり、はずかしかったから。

イ 今、自分の目の前にいる川島さんが突然悲しい顔になったため、驚きをかくせなかったから。

ウ 自分と同じ年の美智子ちゃんが死んでしまっている事実が信じられず、驚いたから。

エ いつか自分も死ぬものだと思っていたが、他人の死を身近に感じて、おそろしいと感じたから。

問八 —— 部⑥「こんなに悲しい人生」とありますが、何が悲しいのですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことを誰にも思い出してもらえないこと。

イ 誰も自分の死を悲しんでくれないこと。

ウ 好きな人に気持ちを伝えられないこと。

エ 誰とも結婚せず、両親よりも先に亡くなってしまうこと。

問九 —— 部⑦「涙声で言った」とありますが、この時の川島さんの気持ちとしてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 鳥谷さんの人生が良いものだったかどうかは今となっては分からないが、もうどうでもよいとなげやりになる気持ち。

イ 自分が自信を持って生きてきた人生が良いものだったかどうか、分からなくなり不安な気持ち。

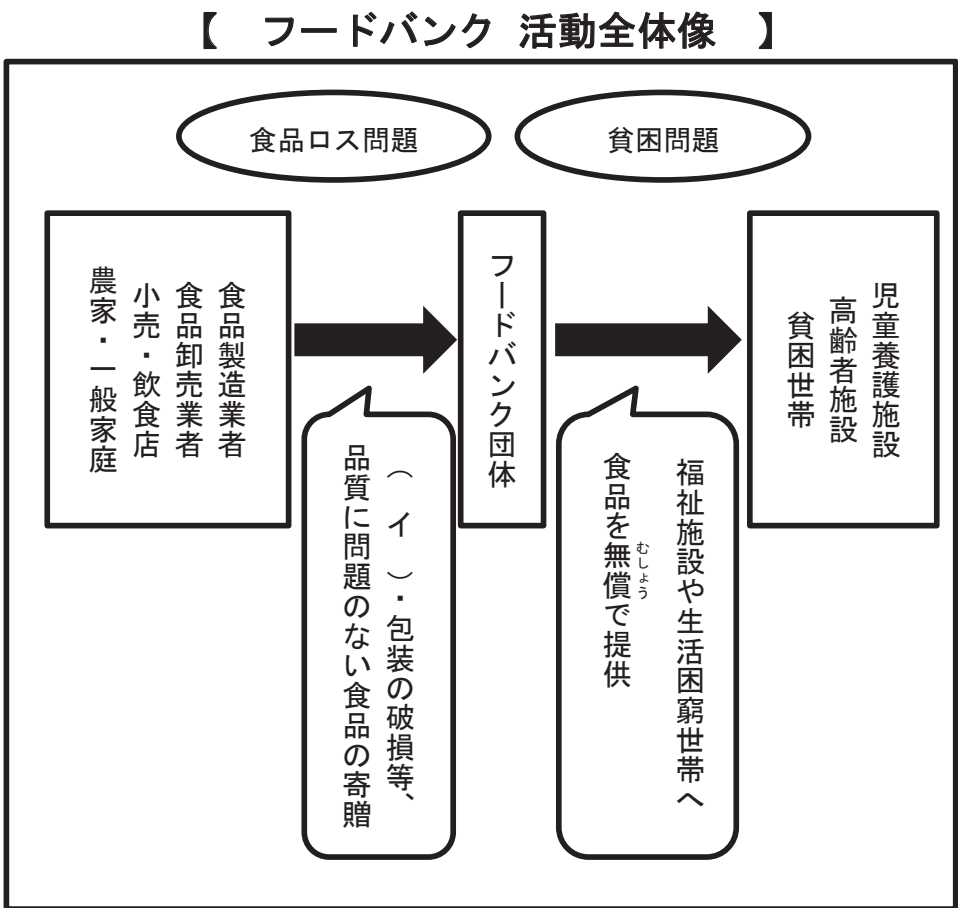
ウ 自分の人生がこれから良いものになっていく可能性が低いことに気づき、悲しむ気持ち。

エ 今となっては確かめることができない鳥谷さんの気持ちを想像し、自分たちがしっかりしなければ、と強く思う気持ち。

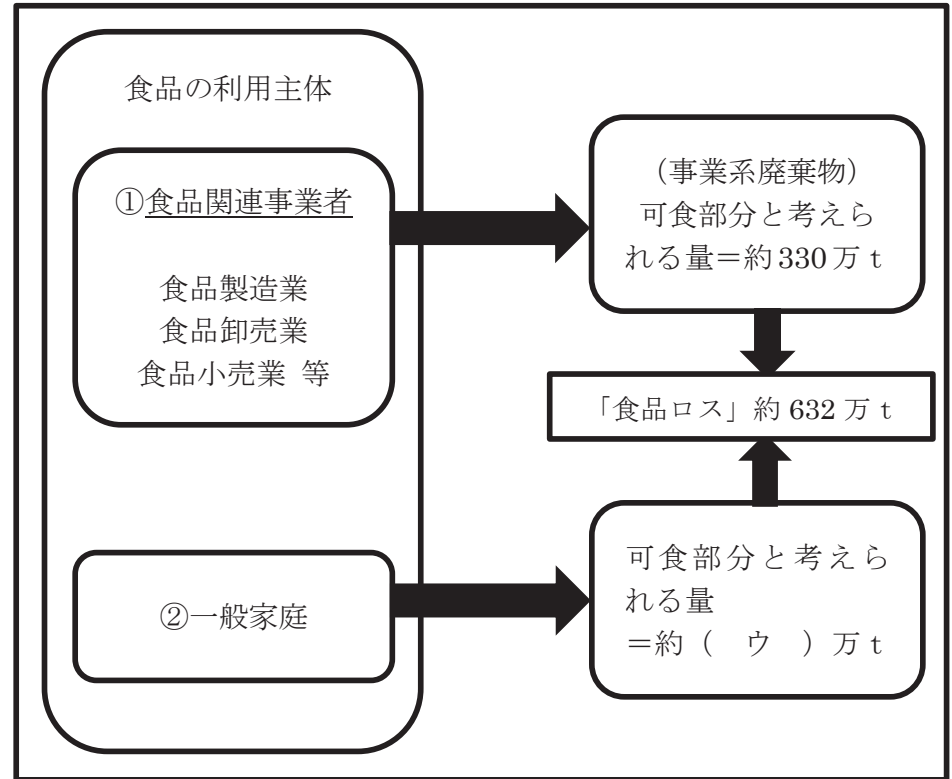
三

次の文章と表を読み、( ) 部ア～オに当てはまる表現を文章と表の中から抜き出して答えなさい。ただし、答えが数字の場合は漢数字・算用数字のいずれでもかまいません。

○フードバンクとは、安全に食べられるのに包装の破損や過剰在庫、印字ミスなどの理由で、流通に出すことのできない食品を企業などから寄贈してもらい、必要としている施設や団体、困窮世帯に(ア)で提供する活動です。



## 【 食品廃棄物の量 】



○日本では年間約一九二七万トンの食品廃棄物が排出されています。その中には約六三二万トンもの、まだ十分食べられるにもかかわらず廃棄されている食品、いわゆる「(エ)」が多く含まれています。食品関連事業者からは約(オ)万トン、一般家庭からは三〇二万トンの食べ物が、まだ食べられるにもかかわらず廃棄されています。

(参考：全国フードバンク推進協議会ホームページ)



